

## 対面／非対面コミュニケーションの関係構造からみた

### 現代高校生の友人関係の様相

—日常生活におけるモバイルメディア利用実態に着目して—

水戸啓明高等学校 小泉悠里

【キーワード】 対面コミュニケーション、非対面コミュニケーション、友人関係、モバイルメディア

#### 1 概要

本研究の目的は、対面／非対面コミュニケーションの関係構造を分析することとおして、現代高校生の友人関係の様相を明らかにすることである。その際に着目するのは、現代高校生の日常的なモバイルメディア利用実態である。社会言説等で多く聞かれるような友人関係の「希薄化」論に対して批判的な見解を示すとともに、理論的考察と実証的考察を相互参照し、現代高校生の友人関係の様相を捉えるための新たな認識枠組みを提示した。理論的考察では、第一に、マクルーハン理論を援用し、対面コミュニケーションにおいてメディアとして動員される「身体」を、他のメディアと比較可能な概念として位置づけた。そして第二に、現代日本のメディア社会において、モバイルメディアをとおしたコミュニケーションは日常的営為であり、とりわけ高校生にとっては友人との関係を取り結ぶうえで重要な位置を占めているということを指摘した。第三に、非対面コミュニケーションの比重が増すということは、ふだん友人と関わるうえでのコミュニケーションチャンネルが多様化するということと同義であるという点を指摘した。そして第四に、そのような多様なコミュニケーションチャンネルのなかに「直接会う」という身体メディアをとおした対面コミュニケーションが並立的に布置され、目的合理的な判断に依拠して各コミュニケーションメディアが選択されているということを示した。また、実証的考察では、以下のような知見が示された。第一に、現代高校生は友人と関わるなかで、重要度の高い内容を伝える際には対面コミュニケーションが最も効果的であると認識しているという点である。この点に関連して、第二に、高校生は対面／非対面コミュニケーションの双方に、相互に代替されない価値を見出したうえでコミュニケーションメディアを選択し、友人と関わっているという点である。総じて、現代の高校生は多層的な対面／非対面コミュニケーションをとおして友人関係を形成、維持しているということが言える。

#### 2 問題の所在

メディアに関わる技術の躍進によって、その普及状況や利用方法が絶え間なく変化している今日、その変化の内実やそれによる帰結を十分に咀嚼する間もなく実践されることが当たり前になっている。殊に、携帯電話やスマートフォンなどのモバイル機器が個々人の必需品となっている現代の高校生は、大人が想定するものとは違った仕方でもモバイルメディアを利活用し、

友人とのコミュニケーションにおいてもそれを多用している。この点において、モバイルメディアは現代高校生の文化形成に埋め込まれた存在であり、単なる道具として利用する以上の意味づけが付与されていることが予想される。一方で高校生に対する社会言説は、彼ら／彼女らのメディア実践を問題視する風潮が強い。このことは、現代高校生の日常世界を理解する際の妨げになるだけでなく、「異常な世界」を生きる存在として捉えられることになる。

携帯電話に代表されるモバイルメディアの利用と友人関係に関する先行研究を概観すると、携帯電話などのメディアを利用している高校生の友人関係は「希薄化」傾向にあるという説と、「選択化」傾向にあるという説に大別できる(辻, 2005)。しかし、前者の議論の背景には、「望ましい友人関係」像があらかじめ設定されており、第三者水準の価値規範が多分に含まれている(松井, 1990; 岡田, 2007)。現代的な友人関係を「問題化」することで、常態的な関係性の様相を明らかにする視点を欠いていると言えるだろう。一方で後者の「選択化」論は、前者の議論に対抗する形で展開され、友人関係の可変性に対して肯定的な態度をとっている(浅野, 2005; 松田, 2000; 辻, 1999)。これらの議論は、行為者水準の価値規範やそれらに基づく行為の実践を叙述している点で共通しているが、「希薄化」論への批判にとどまるものが多い。

では、現代高校生の友人関係はどのように特徴づけられているのだろうか。『子どもの ICT 利用実態調査報告書』(2008)をみると、現代高校生の友人関係の特徴について、携帯電話の所有率が男女ともに9割以上であり、メールや電話、さらに SNS 等を頻繁に利用しているということが指摘されている。このような指摘や先行研究の潮流を踏まえると、現代高校生の友人関係を分析する視点として、モバイルメディア利用実態への着目は不可欠であるといっていようだろう。

では、モバイルメディアをとおしたコミュニケーションがそれ以前のコミュニケーションのどのような部分を変えていくのだろうか。モバイルメディアが多機能化、パーソナル化している今日、非対面コミュニケーションは対面コミュニケーションの性質に近づきつつある。従来、対面／非対面コミュニケーションを明確に隔ててきた時間／空間の同期性の制約や、利用内容や利用範囲を制限してきた金銭面の制約などのさまざまな外部的制約が、技術面、サービス面で克服されることにより、「実際に会っているかのように」コミュニケーションがとれるようになってきているのである。このことは、非対面コミュニケーションの比重が増加しているということの意味するが、それは同時に対面コミュニケーションの衰退をも含意し得るのだろうか。この点については、「重要度の高い内容は直接会って話す」ということがコミュニケーション手段として選択されることに着目したい(Benesse 教育研究開発センター, 2008; 尾崎・久東, 2007)。

メディアとコミュニケーションの相互関連についての先駆的な研究者であるマーシャル・マクルーハン(McLuhan, M., 1964=1987)は、「メディアはメッセージである」と述べ、情報の内容ではなく選択されたメディア固有の効果の重要性を指摘する。この理論を手がかりに、本研究においては対面場面における「身体」をメディアのひとつとしてとらえる。どのような文脈において高校生は対面コミュニケーションを選択するのか、言い換えれば、身体とはどのようなメッセージ性をもつメディアであるのかを明らかにしたい。この点において、本研究は「選択化」論の系譜上にある。

以上のような観点から分析を進める際に、対面コミュニケーションの検討材料としての学校

の存在は看過できない。学校は、子どもの「高校生」という社会的位置を規定するとともに、彼ら／彼女らが独自の日常世界を形成する空間でもある。多くの高校生が日常生活の大部分を学校において友人と過ごしていることを考えれば、学校は対面コミュニケーションを安定的に提供する場としての空間的機能を有していると仮定でき、さらには高校生ならではの友人関係が形成される空間であると言えることができる。このような学校空間の二重性は、高校生が友人関係をとり結ぶうえでどのように作用しているのか検討を加えていく必要があるだろう。

本研究では、このような形で理論的考察を進めるとともに、実証的データに根差した考察を行うために質問紙調査を行う。理論的考察と実証的考察を総合させることによって、現代高校生の友人関係像を捉えるための認識枠組みをより立体的な形で提示していきたい。

### 3 研究の課題と方法

本研究は、「理論的考察」と「実証的考察」から構成されている。理論的考察では、現代高校生の友人関係の様相を読み解く手がかりとなる概念について検討を加え、理論的枠組みを生成していく。

まず、「高校生の友人関係はどのように語られてきたのか」という問いを設定した。先行研究に当たりながら問題の系譜を整理し、得られた知見を本研究の基盤とした。その上で、本研究の理論的枠組みを積み上げていくことが以降の主要課題となる。

次に「現代高校生はどのようなメディア環境のなかに生きる存在なのだろうか」という問いを設定し現代における非対面コミュニケーションの構造を分析した。方法としては、先行研究や調査報告書の検討を中心とした文献研究を行い、第一に、メディアの変容と人間の相互作用の変容とを関連付けて考察し、第二に、現代高校生がどのようなメディア環境に置かれているのかを検討した。

以上を踏まえ、「現代の学校空間はどのような社会的機能を有しているのか」という問いを設定した。学校独自の空間的機能の構造を「対面コミュニケーションの場」という観点から明らかにし、それを「高校生」性を規定する環境的要因のひとつとして位置付けることで、現代高校生の友人関係の様相をより立体的に捉えることができる。

方法としては、先行研究や調査報告書の検討を中心とした文献研究を行う。第一に、学校の空間的機能を明らかにし、第二に、対面コミュニケーションの場としての機能性を検討していく。ここで得られた知見は、実証的考察における分析枠組みとして機能する。

実証的考察では、対面／非対面コミュニケーションの様相を実証的に明らかにした。ここではまず、「どのような文脈で「会うこと」は選択されるのか」という問いを設定した。方法としては、学校をとおした質問紙調査を実施し、その調査結果を分析する作業を行った。分析の手順としては、第一に、現代高校生のモバイルメディア利用実態を概観し、第二に、「身体メディア」のメッセージ性について焦点化した分析を行った。

次に、「現代高校生の友人関係はどのようにとり結ばれているか」という問いを設定した。ここでは理論的・実証的考察から得られた知見を擦り合わせ、現代高校生の友人関係についての新たな認識枠組みを提示した。具体的には、対面／非対面コミュニケーションの関係構造の探求をとおして、「会うこと」の意味を考察した。

メディアと友人関係をめぐる先行研究は数多くある。それらから得られる知見は、現代高校生

の友人関係の様相を説明する際に多くの示唆を与えてくれるが、普遍性をもつものではない。なぜなら、友人との関係性は、社会的、歴史的文脈に依存し、常に形を変えて生成されていくものだからだ。そしてそれらに対する我々の解釈も再構成されていく必要がある。そのために研究は常に更新され、蓄積されていくべきであり、本研究もその作業過程のなかに位置付けている。

## 4 内容

### (1) 高校生の友人関係論

はじめに、子ども／若者に関する社会言説や先行研究を概観したうえで、高校生の友人関係に関する社会言説や先行研究を整理・検討していく。本研究の目的に即してメディア利用との関連を主題に据えたものを取り上げる。

ちなみに本研究は高校生を対象とし、彼／彼女たちの友人関係の様相を社会学的視点から考察するという立場を採用しているが、高校生という段階は、子ども、青少年、若者研究等々の幅広い分野において研究対象の射程に入っている。そのため、より広い年齢／学校段階を研究対象に含んだ先行研究の業績を俯瞰する作業が必要になる。

また、方法としては心理学、社会学諸分野における先行研究を取り上げ、検討を加えていく。前者は、友人に対する主観的な関わりの度合いなど、内容的側面を重視した友人関係論を展開する(松井, 1990; 岡田, 2007)。この視点からすれば、現代の友人関係は「希薄化」している傾向がみられるという。後者は、前者の議論への批判を出発点とし、現代の友人関係は「希薄化」しているのではなく「選択的」になっていると主張しており、形式的側面の変容を指摘する(浅野, 2007; 福重, 2007; 松田, 2000)。また、「選択化」論はこのような指標に基づき選択化の内実を類型化する作業を積み重ねてきたが、友人関係の総体を究明した先行研究は管見の限り少ない。よって、現代高校生の友人関係の全体像を明らかにする必要がある、そのための実証的調査研究が俟たれているといえる。

次に、以上の議論を踏まえて高校生ならではの友人関係の在り様を検討していく。高校段階に対象を絞った先行調査・研究を概観すると、現代高校生は学校という枠組みのなかだけでなく、学校外においても広範なネットワークを形成している(荒牧, 2001)。また、学校内では、友人との摩擦を回避するためお互いに気を遣い合う傾向があるが、そのことが友人関係を充足させるための条件でもあることが示されている(竹内, 2009)。これらの議論は、一方では、学校外での友人ネットワークの形成・拡大がメディア環境の発展によって助長され、広範な関係性がとり結ばれていることを指摘し、もう一方では、学校内の友人関係において、互いに気遣い合うことによって双方が満足する友人関係をとり結んでいるということを指摘している。しかしながら、これらは常に並行して語られる傾向があり、その合流点が不明瞭なままになっているということが指摘できる。

### (2) モバイルメディアと友人関係

先行研究の業績と課題を整理したうえで、ここでは現代高校生がどのようなメディア環境のなかにいるのか、日本のメディア社会の変遷を俯瞰する。

メディアの発展とそれによるコミュニケーションの性質の変容については、マクルーハン(1964=1987)の理論とそれ以降の議論の流れを整理し、メディアに対する意味づけの変遷を探っていく。マクルーハン理論以降、「メディア」の概念はより広義に再定義されてきており、メディ

ア研究において単なる情報伝達媒体としての「メディア」に留まらない概念把握が必要であることはもはや定説化しているといつてよい(吉見, 1994)。また、メディアの影響によって人間の思考・行動様式が受動的に変容していくという視点だけでなく、メディアを積極的に利用・消費する多様な「オーディエンス」としての「能動的な受け手」に着目したアプローチが有効であるといえる(藤田, 1988)。

では、日本においてメディアはどのような社会的役割を担ってきたのだろうか。ここでは、モバイルメディアに焦点化して検討していきたい。

日本独自の技術発展を経てマルチメディア化したモバイルメディアは、現代人の時間／空間感覚を変容させる機能を有している(富田, 2102)。しかしその実相は、社会的地位・属性によって異なっていることが予想される。個々人の社会的地位・属性にはさまざまな制約があり、そのなかでの利用方法・目的も多種多様であると考えられるためである。このことから、メディア利用者はそれぞれのメディア実践をとおして独自の文化体系を形作っていると言える。さらに、メディアをとおした非対面コミュニケーションの充足は、「会う」という対面コミュニケーションの意味変容をもたらす(Meyrowitz, J., 1985, 1985=2003)。「会わなくて済む」事態が確実に増えている時代状況においては、「会うこと」に対する必然性は薄れるものの、目的合理性が付与され、むしろその重要度が高まるといえるのではないか。「会う」という「身体」メディアは能動的に選択されるものになり、他の諸メディアと並列的に布置されるのである。

では、前節の内容を踏まえ、高校生という立場や環境による制約と、そのなかでモバイルメディアが利用されるとき立ちあらわれるコミュニケーション形態の「高校生」性を検討していこう。高校生はさまざまな外部的制約のある環境のなかにいる。とりわけ学校の存在は、制度的・空間的機能の面において特殊であり、「高校生」性を際立たせる重要な要因のひとつである。高校生は学校で日常的に会う友人と、メディアをとおした非対面コミュニケーションをひんばんに行っている。このことから学校は対面コミュニケーションの土壌であり、そのなかで独自の友人関係がとり結ばれていることが予想される。

### (3) 学校と友人関係

前節までの考察を踏まえて、ここでは学校が現代高校生にとってどのような場として機能しているのかを明らかにする。

まず、学校という制度的空間の機能性に着目し、現代の日本において学校とはどのような社会空間であるのかを検討する。社会の変動とそれに連動する形で展開されてきた教育政策によって、学校教育への要請は歴史的に変容してきた。現代において学校教育に期待されるものは多元的であり、また児童・生徒へのまなざしはより支援的になってきている。そしてその一端として、学校はいま子どもの空間的・心理的「居場所」としての社会的機能が期待されている。それに応答する形で、学校の「居場所」化の流れは肯定的な形で推進されつつある(新谷, 2008)。

では、高校生の側からは学校ないし学校教育に対してどのような認識や意味づけがなされているのだろうか。学校教育への期待が多元化し、学校がそれに応える形でさまざまな社会的機能を担おうとするなかで、高校生の学校へ意味づけもまた多元化しているということは想像に難くない。とりわけ高校教育については、高等学校の在り様を特徴づけてきたトラッキング構造の弱体化がそれに拍車をかけているといわれている(秦ほか, 2004)。また、現代高校生にとって学校は「友達との友情をはぐくむ」ための「場」なのであり、友人関係形成のための重要な意味を持つ空間

として位置づいている(Benesse 教育研究開発センター, 2004; 飯田, 1999)。つまり、現代の学校の空間的位相に対して、彼／彼女たちなりの意味付けを付与しているといえよう。

次に前節での検討を踏まえ、対面コミュニケーションという観点から学校の機能を考察する。モバイルメディアが社会的な接近可能性を高めているとすれば、学校は空間的な近接性を担保していると言える。友人とのモバイルメディアをとおした非対面コミュニケーションは、少なくとも学校においてはかなり制限される一方で、対面コミュニケーションの場合は、制度的枠組みによって一定的に設けられている。このような、友人関係における対面／非対面コミュニケーションの構造こそが現代の「高校生」性であると言えよう。このことから、友人関係の様相を捉えるには、対面／非対面コミュニケーションの構造を別個のものとして論じるのではなく、双方を含みこんだ全体的作用を照準した考察を行う必要があるだろう。

#### (4) 質問紙調査の結果と考察

実証的考察では、友人関係とモバイルメディアの利用に関する質問紙を作成し、集計結果の考察を行う。以下の表は、質問紙調査の概要である。紙幅の関係上、本調査の考察のみ報告する。

表 1. 質問紙調査の概要

	予備調査	本調査
調査テーマ	「高校時代の友人関係に関する調査」	「高校生のモバイルメディア利用と友人関係に関する調査」
調査方法	質問紙による自記式調査	学校を通した質問紙による自記式調査
調査時期	2012 年 7 月	2012 年 9 月
調査対象	大学 1 年生(2 大学)	高校 1 年生～3 年生(3 校)
サンプル数	44 名(男性 13 名, 女性 31 名)	1, 029 名(男子 556 名, 女子 473 名)

まずモバイルメディア利用実態をみると、モバイルメディアをとおしたコミュニケーションは、日常的に、そして親しい友人とのやりとりにおいて多用されているということが明らかとなった<sup>(1)</sup>。その内実をみてみると、電話やメールよりも、SNS やラインなどを利用したコミュニケーションが行われているということが示された。また「SNS」や「ライン」は比較的新しいタイプのサービス・アプリケーションあり、利用者によって利用目的がさまざまに設定されるものである。現代高校生はそれらを友人とのやりとりを行うためのツールとして柔軟にとり込みながら高校生独自の文化を築いているということがわかる。さらに、インターネット上でのコミュニケーション形態は、1 対 1 のものから、1 対 n、あるいは n 対 n のものに移行しつつあることも示された。

しかし、彼ら／彼女らがモバイルメディアをとおした非対面コミュニケーションに没入し、対面コミュニケーションが軽視されているのかといえそうではない。モバイルメディアに関する認識を尋ねた項目<sup>(2)</sup>では、7 割以上の生徒が「SNS やメールで常につながっていることで、お互いの友情を確認できる」とは認識していないことが示された。さらに、友人関係に関する認識を尋ねた項目<sup>(3)</sup>では、7 割以上の生徒が「携帯電話や SNS があれば、友達と直接会う必要はないと思う」という質問項目に対して否定的な回答を示しており、その一方で、ほとんどの生徒が「本当に大切なことは会って話すべきだ」と認識していることが示されたのである。このような結果

から、「会うこと」には重要な意味づけがなされていることが示唆された。

この点についてさらに考察していこう。「メディア選択パターン」を問う質問項目<sup>(4)</sup>の分析をとおして明らかとなったのは、以下の2点である。

第一に、トラブル対処の手段としては「相手と直接会って話す」ことが最も効果的な手段として認識されているということである。インターネット上であるにせよ、学校であるにせよ、そしてどのようなトラブルの内容であるにせよ、高校生にとって「会って話す」ということは、他のコミュニケーションに代替されない付加価値があるようだ。

この点に関連して、第二に、トラブル対処のために実際に選択されるメディアとしては、「身体」が選択される割合が比較的低いという点である。このことは、回答者の属性からみた際に、性別において有意差がみられる項目が多かった。女子は男子に比べて実際の行為として「身体」メディアを積極的に選択しない傾向がみられた。女子は、男子に比べてSNS利用の目的についても、「発言機能中心群」<sup>(5)</sup>を利用する生徒が多いことから、モバイルメディアをとおした友人関係については積極的であることが伺えるが、対面コミュニケーションの選択については、やや消極的であるということが言える。しかし、「SNSやメールで常につながっていることで、お互いの友情を確認できると思う」や、「携帯電話やSNSがあれば、友達と直接会う必要はないと思う」などの項目をみても、否定的な回答を示している生徒の割合は男子と同様か、それ以上であることから、非対面コミュニケーションに価値を置いているということは一概にはいえないだろう。そうであるならば、「身体」メディアを「選べない」ということだろうか。「本当は「身体」メディアを選択したいが、そのようにできない」というような要因があるとすれば、友人関係をとり結ぶうえで問題性として指摘できる。また、非対面コミュニケーションは誤解が生じるリスクが高いということが自由記述の検討から示された<sup>(6)</sup>が、トラブル対処の手段として非対面コミュニケーションが選択されることは、最善の手段とは思われないメディアを選択せざるを得ないという状況が想定できる。しかしこの点について、学校場面においては、「身体」メディアが選択される割合が高まるという結果から、学校空間は、モバイルメディアによって強められる対面コミュニケーションの回避傾向を緩和する機能があるのではないだろうか。

全体をみると、対面／非対面コミュニケーションは、どちらも友人関係をとり結ぶうえで重要な位置を占めていると言える。しかしながら、その双方にはそれぞれに功罪があるということもまた言えそうである。

## 5 全体考察

では、これまでの理論的考察と実証的考察から得られた知見を総括し、本研究において明らかになった知見を提示していこう。

まず、これまでに得られた知見を総括したあと、対面／非対面コミュニケーションの全体を捉えた友人関係の様相を述べていく。

現代高校生は、対面コミュニケーションの制約を克服するツールとしてモバイルメディアを利用し、非対面コミュニケーションをおこなっている。しかしながら、非対面コミュニケーションの限界を自覚しており、その限界性が露わになった際には、非対面コミュニケーションのそのような側面を克服するために対面コミュニケーションが選択される。よって、選択された「身体」というメディアは、日常的に会う行為よりもそのメッセージ性が強まっているということができ

る。

また、今日的なメディア社会のなかで、コミュニケーション空間は多能的に創り出され、私たちはそのなかに参入していくことになる。その際に、それぞれに異なった自己が立ち現れることは必至の事態であり、価値観を共有しないことが前提とされる他者とのコミュニケーションにおいてはむしろ望まれるコミュニケーションの作法であるとも言える。

最後に、本研究上のもう一つの重要な関心事であった「「会うこと」の意味はどのようなになっているのか」という問いに対する応答を試みる。前節で検討したように、選択という過程を経た「会うこと」の意味は再構成され、よりメッセージ性が強まった形で相手に伝達されることになると考えられる。とりわけ高校生は、トラブル対処の際に、「相手への誠意」を最も効果的に示すコミュニケーションメディアとして「身体」メディアを選択しているのではないか。この点において、目的合理的な「身体」メディア選択は、日常的な対面コミュニケーション以上の価値が付与された対面コミュニケーションとして再認識されているということが言えるだろう。

非対面コミュニケーションの趨勢は、同時に対面コミュニケーションの重要性を高める効果をもつ。それは、非対面コミュニケーションの限界からくるものであり、対面コミュニケーションの価値は非対面コミュニケーションに代替されないことを意味している。

#### 【注】

- (1)「親しい友人とのモバイルメディアをとおしたやりとりの手段とその頻度」を5件法で尋ねた。
- (2)「SNS やメールで常につながっていることで、お互いの友情を確認できると思う」に対して、4件法で回答を求めた。
- (3)「携帯電話や SNS があれば、友達と直接会う必要はないと思う」、「本当に大切なことは会って話すべきだ」に対して、4件法で回答を求めた。
- (4)対面／非対面場面における友人関係上の問題状況を設定し、それぞれについて対面／非対面コミュニケーションのどちらを解決方法として選択するのか、回答を求めた。
- (5)「1番に利用する SNS はなんですか」という質問に対し、「GREE」、「モバゲー」はゲーム機能を中心とした SNS サイトであるため、「ゲーム機能中心群」とし、「Twitter」、「リアル」、「ブログ」は「つぶやき」や「日記」など発言機能を中心とした SNS サイトであるため「発言機能中心群」とした。「mixi」、「facebook」については、ゲーム、発言機能双方の性質を兼ね備えており、利用者によって利用目的が大幅に異なることが予想されるため、「マルチ機能群」とした。
- (6)たとえばそれは、「ふざけていったつもりが真剣に受け止められた」、「怒っていないのに怒っていると思われるでケンカになった」などの回答に示されている。

#### 【参考文献】

- 浅野智彦, 2005, 「物語アイデンティティを超えて?」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, 77-135.
- 荒牧草平, 2001, 「学校生活と進路選択——高校生活の変化と大学・短大進学」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』ミネルヴァ書房, 63-80.
- 新谷周平, 2008, 「居場所化する学校／若者文化／人間関係——社会の一元化を乗り越えるための課題」広田照幸編『若者文化をどうみるか?——日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバ



一, 62-92.

Benesse 教育研究開発センター, 2004, 『モノグラフ・高校生 特別号』(2012年12月10日取得,

<http://a111.g.akamai.net/f/111/143111/15m/benesse1.download.akamai.com/143111/j/monographpdf/3/3-vol-sp01.pdf>).

——, 2008, 「子どもの ICT 利用実態調査」(2012年12月10日取得,

[http://benesse.jp/berd/center/open/report/ict\\_riyou/hon/index.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/ict_riyou/hon/index.html)).

藤田真文, 1988, 「「読み手」の発見——批判学派における理論展開」『新聞学評論』37: 67-82.

福重清, 2006, 「若者の友人関係はどうなっているのか」浅野智彦編『検証・若者の変貌失われた10年の後に』勁草書房, 115-47.

秦政春・片山悠樹・西田亜希子, 2004, 「現代高校生にとっての「高校」」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』30: 113-42.

飯田浩之, 1999, 「入学した高校の先にみえるもの」高木秀明編『高校生の心理②』大日本図書, 99-128.

松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用——関係希薄化論から選択的関係論へ」『社会情報学研究』4: 111-21.

松井豊, 1990, 「友人関係の機能」斎藤耕二・菊池彰夫編『社会化の心理学ハンドブック——人間形成と社会と文化』川島書店, 283-96.

McLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York: McGraw-Hill Book Company(=1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房).

Meyrowitz, Joshua., 1985, *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*, Oxford Univ. Press(=2003, 安川一・高山啓子・上谷香陽訳『場所感の喪失・上——電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新曜社).

岡田努, 2007, 『現代青年の心理学——若者の心の虚像と実像』世界思想社.

尾崎かほる・久東光代, 2007, 「女子生徒の友人とのコミュニケーションスタイルと交友関係意識」『日本女子大学紀要』17: 73-85.

竹内慶至, 2009, 「友人関係は希薄化しているのか」友枝敏雄編『現代の高校生は何を考えているか』世界思想社, 38-60.

辻大介, 1999, 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版.

辻泉, 2005, 「若者の友人関係形成と携帯電話の社会的機能」『松山大学論集』16(6): 143-64.

富田英典, 2012, 「都市空間、ネット空間とケータイ」岡田朋之・松田美佐編『ケータイ社会論』有斐閣, 138-52.

吉見俊哉, 1994, 『メディア時代の文化社会学』新曜社.